

なった。いよいよ本格的に天文の学生になった気がして大いに興奮したものである。当時は、天文学教室は麻布の狸穴にあったが、空襲を避けて教室が諏訪へ移る少し前に、私どもは先生の天体力学と軌道論の集中講義を受けた。いつ空襲で死ぬかもしれないから、その前に教えるといわれて、朝から晩まで連日の物凄い講義であった。先生は例の風呂敷を開いてすり切れた大型封筒につまんだ原稿を取り出して、早口でしゃべりながら黒板に読みにくい字で式を猛烈な速さで書きなぐっていくのが常であった。私どもは啞然としてノートをとるのが精一杯であった。夕暮が迫り1日の講義が終ると頭は完全に思考能力を失って失神状態におちいったことを覚えている。それ以後、私たちはどんなにわからない講義を聞いても全然動じないことを身につけた。また細かいことはわからなくても大よその概念を推察する術も覚えたような気がする。とにかく内容は豊富であった。1つの論文は平均10分から20分くらいの講義時間で片づけられたように思われる。このような講義は敗戦後本郷に移ってからも続けられた。おびただしい概念と方法がその中に含まれていた。先生の「天体力学」の名著をひろげて見れば、その一端が知れるであろう。決して名講義とはいえないが、あのような講義のできる人は今後再びあらわ

れないであろう。

先生は、あれほど偉い人でありながら変にコンプレックスのかたまりのようなところがあった。自信を持ちながら、一方では人がどう思っているか気にする風であった。文学青年じみた青臭い面も持って居られ、そうした文章も書かれた。私は先生のそうした面には一切おつき合いしなかったが、弟子として甚だ非人間的であったと後悔している。

年をとられてからもその頭脳は少しもおとろえず、最近素粒子、原子核を勉強して居られた。天体力学の名著を脱稿されてから、岩波全書の「天文学」の改訂をされた。私も、多くの人の助力を受けてようやくその改訂版を出すおついでをすることができた。これは、以前から先生が心残りにしておられたことの1つであったので、私としても肩の荷をおろす思いであった。この本も先生の特徴の一端を伝える奇書である。

先生は何しろけたはずれの人であったので逸話は多い。しかし、私にはそれを書く文才はない。私は、ただこの世紀の巨人が去った後のすき間の大きさを感じて、御冥福を祈るのみである。天国で、愛弟子であった畑中さんと天文学を語り、後進のためにわが国の天文学の行方をいつまでも照らして下さいよう先生にお願いしたい。

萩原先生のこと

古 在 由 秀

昭和54年1月29日、萩原雄祐先生が亡くなった。萩原先生は昭和21年の秋から32年まで、10年以上にわたって東京天文台長をつとめ、第二次世界大戦後の非常に困難な時代に、東京天文台の研究水準の向上に努力されたことは誰でも知っている。岡山天体物理観測所の口径188cmと91cmの望遠鏡や、乗鞍コロナ観測所、太陽電波観測用の10mのパラボラアンテナなどはいずれも先生の台長時代に実現したものであり、その後完成した諸施設も、先生の構想によるところが多い。また、何よりも天文学の研究のための職の拡大にもつとめ、台長就任時には、技師11名、技手19名、合計32名であった東京天文台の定員も、昭和32年には、教授、助教授各5名、講師級12名、助手9名、技官49名、合計128名と4倍になっている。「俺が台長をやっていないと、おまえも天文で職を得ていないぞ」とよく先生にいわれたが、この数字を見ればそれもたしかである。

先生の東京天文台長時代の業績もさることながら、筆者にとって忘れられないのは先生の講義であり、その著書である。もともと、筆者も先生が天文学者になっておられなければ、天文学で職をえていないだけでなく、大

学で天文学科にも入っていなかったであろう。先生の「天体力学の基礎」第一巻(上)が出版されたのは筆者が旧制高校3年の秋であり、これを読んで天体力学を勉強したいと思いついた。また、同じ頃に、筆者は東京大学の各学部の授業の時間割りを見てまわった。理学部でも、他の学科は、何々論とか何々概論とかいう無味乾燥な授業の題目しかなかったのに対し、天文では、「3体問題の位相数学」とか「希薄天体の量子物理学」といったような題目がみられ、これらが戦中戦後に学問にうえていた筆者にはとても新鮮に思えたのである。これらが、先生の天文学特別講義であった。

こういうことで、「天文では飯はくえないぞ」と言われたにもかかわらず、天文に進む決心をしたので、卒業後のことはともかく、大学では気に入る授業に出たいということしか考えていなかった。

入学式の日、先生が、「大学の授業は皆の学問のための触媒にしかすぎない」と云われたことを今でも覚えている。ところが、その触媒たるや、我々のなかの化学反応物質よりはるかに大量であり、反応物質の方がおしつぶされてしまいそうである。ともかく、先生は週に3回

の講義を持っておられ、海外出張の間をのぞいてはまず休講はなかった。その1つは天体力学で、あとの2つは上記の題目からえらんだ天文学特別講義で、午前中の1つは2時間で終るが、あとの2つは3時間から4時間も続く。先生の特技は数式を黒板一杯に書きながら、他のことをしゃべれることで、これでは学生はノートもとれない。この講義のノートの一部が後に大著 *Celestial Mechanics* 全5巻(5600頁)の原稿になる。

先生は、筆者が学生の頃は東京天文台長などでお忙しく、また、東京天文台に就職してからは、先生とは台長と職員組合の委員長という関係が長く続き、個人的にお話したことはほとんどない。組合の委員長として先生に感謝していたのは、東京天文台を職員が意欲をもって働ける、働きがいのある職場にしたいという我々の立場を多少なりとも理解して下さったことで、公式の場では、我々の要求に対し「そんなことは駄目だ」と言われても、後で、「あれはこう処理した」と何とかして下さったことも少なくない。また先生が時々仕事はうまくいっているか、研究の進み方はどうかと声をかけて下さったことを忘れられない。

先生といろいろお話をするようになったのは、先生が東北大学退官後、筆者も滞在していたスミソニアン天文台に度々こられるようになってからである。もともとスミソニアン天文台に筆者が行くようになったのも、台長のホイップルが、スプートニク以降天体力学者の不足をおぎなうのに、萩原先生のところなら誰かいるはずと、探しにきたためである。先生が大学を退官されたことをホイップルに云うと、早速にでもきていただいた

ということになった。ホイップルは先生に長い聞いてほしいという意向であったが、先生の方は、あの辺の寒い冬はいやだということで、夏をはさんでだけこられた。同時にイエール大学のブラウワー台長からも話があり、その夏季大学で毎年のように講師をつとめられた。

先生は、アメリカでも日本でも同じように講義をされるので、アメリカの親切な講義になれていた聴講生はかなりまごついたらしい。ブラウワーも、「萩原先生は学生に親切でない」と筆者にこぼしたことがある。といっても先生の広い学識には驚いたらしく、彼の推薦によって1960年にはアメリカ学士院からJ. ワトソン・メダルをおくられ、また、彼の後をついで、1961年から2期6年間、IAUの天体力学委員会の委員長をつとめられた。同時に、IAUの副会長もつとめておられた。

先生のアメリカでの講義は、しかしながら、ヨーロッパ育ち、特に東ヨーロッパ育ちの天体力学者に深い感銘をあたえた。そして、彼等のすすめで *Celestial Mechanics* の出版を決意される。その第1巻は「天体力学の基礎」の英訳であり、それ以降は、70才を過ぎてから執筆されたものである。

正直に云ってこの本は初心者向けの教科書ではなく、先生の講義と同じく難しく、しかも統一のとれたものでなく、筆者も校正のお手伝いをしたが、かなり誤りがあるはずである。しかし、天体力学のすべてをもうらしていることは確かである。なによりも、先生が80才すぎまで、このような本をお書きになったことはただ頭が下るばかりで、筆者も死ぬまでに、せめて、この1巻分でも書けるようにと努力したいと思っている。

故萩原雄祐先生(1897~1979)略歴

明治30年	大阪市に生れる。	27年	ヨーロッパへ出張 (IAU総会など)
大正10年	(1921年) 東京帝国大学天文学科卒業 東京帝国大学助手兼東京天文台技手	29年	文化勲章
12年	東京帝国大学助教授	31年	東京大学評議員
12年~14年	在外研究員として欧米へ(ケンブリッジ大学など)	32年	東京大学退職、東京大学名誉教授、東北大学教授
昭和2年	兼任東京天文台技師	35年	東北大学退職、宇都宮大学学長(昭和39年まで) 米国学士院より J. Watson 賞
3年	米国へ出張(ハーバード大学など)	36年~42年	IAU副会長・天体力学委員会委員長
5年	理学博士	40年	宇都宮大学名誉教授
10年	東京帝国大学教授兼任東京天文台技師	42年	瑞宝勲一等
13年~14年	欧米各国へ出張 (IAU総会、ハーバード大学など)	51年	朝日賞
19年	帝国学士院会員	54年	死亡
21年	東京天文台長		叙正一位、銀杯を賜る。
25年	ヨーロッパへ出張 (URSI総会など)		